

日本地球惑星科学連合における地理学の位置づけと将来展望 Geography in JpGU: current status and future perspectives

*小口 高¹、山田 育穂²、早川 裕弐³、河本 大地⁴、齋藤 仁⁵

*Takashi Oguchi¹, Ikuho Yamada², Yuichi S. Hayakawa³, Daichi Kohmoto⁴, Hitoshi Saito⁵

1. 東京大学空間情報科学研究センター、2. 中央大学理工学部、3. 北海道大学大学院地球環境科学研究院、4. 奈良教育大学、5. 関東学院大学経済学部

1. Center for Spatial Information Science, The University of Tokyo, 2. Faculty of Science and Engineering, Chuo University, 3. Graduate School of Env.Science, Hokkaido University, 4. Nara University of Education, 5. College of Economics, Kanto Gakuin University

日本地球惑星科学連合（以下連合と記す）には、2005年の発足時から地理学に関連する学会が団体会員として参加している。2019年2月の時点において、連合の50の団体会員のうち学会名に地理の語を含む学会が6つある。他に学会の英語名に Geographical を含む学会や、地理学と関連が深い地図学や地形学の学会なども参加しており、地理学は連合の中で一定の役割を果たしている。特に、連合の地球人間圏セクションでは地理学の研究者が主体的に活動している。一方、地理学関連の諸学会の会員の中で、連合の大会や活動に参加している人の比率は低い。この理由として、地理学者の過半を占める人文地理学者が理系色の強い連合に親近感を持たないことや、各学会が独自の春季大会等を行っており、連合大会と重複感があることなどが挙げられる。しかし、連合と地理学が強く結びつくことは、双方にとってメリットがあると考えられる。近年、文科省などが科学における文理連携・融合を重視しているため、連合の活動を理系の研究以外にも広げることが望ましいが、この際には文理の連携を長年実践してきた地理学が貢献できる。一方、2022年度に高等学校の地歴科で必修となる新科目「地理総合」において、自然災害や地球環境問題が重視されていることに象徴されるように、地理学の関係者が地球科学の素養を高める必要も生じている。本発表では、連合と地理学が連携しつつ発展していくための検討を行う。発表者は連合大会に継続的に参加している3世代の自然地理学者、人文地理学者、および修士まで工学を学んだ後に地理学のPhDとなった研究者の5名であり、多様な側面からの考察を試みる。

キーワード：地理学、日本地球惑星科学連合、連携

Keywords: Geography, JpGU, Collaboration